

かわら版

(この資料は全部お読みいただいても 60 秒です)

電子インボイスの波に乗る！Peppol 対応の基本と導入のヒント

インボイス制度が始まって約 1 年半が経ち、企業の請求業務にも徐々に変化が見られています。2025 年以降、注目が集まっているのが「電子インボイス（デジタルインボイス）」の導入です。これは、PDF や紙ではなく、データ形式で統一された請求書をシステム間で直接やり取りする仕組みで、今後の業務効率化・ペーパーレス化を進める大きな鍵となります。

この電子インボイスで国が採用しているのが、「Peppol（ペポル）」という国際規格です。ヨーロッパを中心に広がってきたこの標準は、請求書データを共通のフォーマットで送受信できることが特長で、日本でもデジタル庁と JIPDEC が「Peppol アクセスポイント（AP）」の整備を進めています。Peppol を使えば、異なる企業の異なる会計システム同士でも、請求データを自動で読み込むことが可能となります。

では、中小企業にとってもこの流れは無視できないのでしょうか？ 結論から言えば、将来的には“取引条件の一部”となる可能性が高いと考えられます。すでに大企業や官公庁では Peppol 対応が進みつつあり、取引先から「電子インボイスで送ってほしい」と依頼されるケースも増えてくるでしょう。そのときに備え、今のうちから基礎的な知識と対応準備を進めておくことが重要です。

導入にあたっては、既存の会計ソフトや請求書発行システムが Peppol に対応しているかを確認しましょう。クラウド型の多くのサービスは今後対応予定としており、順次アップデートが提供される見込みです。また、Peppol ネットワークに接続するには、「Peppol アクセスポイント事業者」と契約する必要がありますが、無料または低コストで利用できるサービスも登場しています。

電子インボイス導入は、最初は敷居が高く感じられるかもしれませんが。しかし、将来的な手入力の削減、仕訳の自動化、保管コストの削減など、業務効率に直結するメリットは大きいものです。この機会に、貴社でも電子インボイスの導入を少しずつ検討してみてはいかがでしょうか。